ISSN 1883-3748

環境教育研究マネジメントセンター

News Letter

第2号 2009.2.25

長崎大学環境科学部
URL:http://www.env.nagasaki-u.ac.jp/
Tel&Fax:095-819-2720

■「観光・環境」のまちづくり市民講座開催

―『篤姫』にまなぶ講演&「まちエコ講座」発表会―

2月19日(木)、「雲仙Eキャンレッジ交流センター」(雲仙市小浜町)で、本センター主催の市民講座が開催された。

副センター長の馬越孝道准教授よる開会のあいさつの後、第1部として深見聡准教授による講演「歴史を活かした観光まちづくり - 大河ドラマ『篤姫』にまなぶ -」があった。このなかで、視聴率が好調に推移した背景として、幕末から明治を生きた足跡を偉業だけではなく身近な人間性といった生き方に焦点をあてたことを指摘。来年、長崎も舞台となる『龍馬伝』がスタートするが、人物やできごとにまつわるエピソードや食などを追体験できる機会で観光の活性化が可能と話した。県内で直接ドラマには登場しない地域であっても、これを好機として自らの地域を知ってもらう官民一体となった取り組みが重要と訴えた。

第2部は、「まちエコ講座」発表会(長崎県受託「みんなで学び実践する「まちエコ講座」モデル事業」成果報告会)と題して、8課題・約20名の環境科学部学生が成果発表をおこなった。このなかで、渡邊貴史准教授のゼミ生は「長崎県小浜温泉地域における地域資源を活かした取り組みの現状」と題して報告(左下写真)。地域資源を定義し、実際に類型化し整理することで、観光や地域振興が地域特性に立脚したものになり得ると提言した。

その他、街路景観・地熱利用・住民の環境意識・農産物直売所・不法投棄ごみ問題など、環境を扱う多様なテーマで発表した学生と受講者とで忌憚のない活発な質疑応答がなされた。

Eキャンレッジ交流センターは、去年3月より長崎県環境部・雲仙市の協力を得て、環境科学部が無償で借り受けており、環境をテーマとした学びの拠点となることが期待されている。去年の開所記念公開講座の参加者を上回る約50名を迎えることができ、活況のうちに終えることができた。

今年は、雲仙市・長崎県との共催講座を定例化して開講していく予定である。これからも環境教育研究マネジメントセンターの活動にぜひご理解とご協力をお願いしたい。

観光にドラマ活用を 雲仙

長崎大が市民講座

環境問題の学生発表も

【雲仙】長崎大環境科学部「環境教育研究マネジメントセンター」はこのほど、雲仙市小浜町の雲仙Eキャンレッジ交流センターで、観光と環境をテーマにした市民講座を開いた。

「歴史を生かした観光まちづくり―大河ドラマ『篤姫』に学ぶ」と題し講話。「確かに」と述べ、来年放映の大河ドラマ「龍馬伝」にも期待を寄せていた。

学生は約二十人が八班に分かれ、小浜温泉地域の街路景観の特徴や雲仙市民に対する環境意識調査などについて研究成果を披露。海岸の漂着ごみについて調べた班は「外国からと思われがちだが、ほとんどは日本の普段目にするようなごみばかり。いろんな環境問題について身近なことから考えてほしい」と呼び掛けた。

摩藩では豚肉を食べる文化が中国から琉球を経て入っており、江戸末期、篤姫は豚肉を食べていたと紹介。「ドラマは絶好の地元アピールの機会であり、好んで食べたものなど小さな事も大切」と述べ、来年放映の大河ドラマ「龍馬伝」にも期待を寄せていた。

▲観光と環境をテーマに開いた市民講座で、講話する長崎大の深見聡准教授＝雲仙Eキャンレッジ交流センター

講座の様子を伝える長崎新聞記事(2月25日付)

【もくじ】

■「観光・環境」のまちづくり市民講座開催 …… 1
■出張報告ー中国・黄山で環境を考える…… 2
■連載 長崎まちエコ探検② 中島川の眼鏡橋 …… 3
環境科学部ゼミめぐり② 高尾ゼミ …… 3
■書架『村落共同体崩壊の構造』…… 4

■出張報告―中国・黄山で環境を考える

センター専任教員　深見 聡（環境科学部准教授・観光学）

去年12月に中国安徽省黄山市で開催された「5th China Tourism Forum」に参加・発表する機会があり、初の中国へと向かった（右写真）。

私の報告内容は、首都大学東京の井出明准教授と共同で「災害復興と観光」と題して、雲仙や桜島などの例を挙げながら、両者の関係性の類型化を試みたものである。質疑応答など有意義な時間を過ごせたが、やはり印象的であったのは、世界複合遺産・黄山の景観（1990年指定）と、黄山市黟県にある世界文化遺産・西遞村と宏村の伝統的なまち並み（2000年指定）を訪ねたエクスカーションだった。

都市化が急激に進む中国の環境汚染問題とは、まるで無縁のこれらの地域は、喧騒から隔絶された時空を体感させてくれた。黄山（下写真）は花崗岩の隆起と風雨による浸食が、山水画発祥の地とされる「怪石・雲海・奇松・温泉」といった「四絶」とよばれる自然景観を形成し、2004年には世界地質公園（ジオパーク）にも指定されている。

また、明・清時代に築造された建物のほとんどが公開されている宏村は、至るところで地元の美術学校の学生たちが写生画の練習に励んでいた（右写真）。

同行してくれた中国人ガイドによると、とくに古いまち並みは「開発から取り残された場所」として見向きもされなかった時もあったという。急激な経済発展を続ける中国にあって、むしろ「取り残された」からこそ、いま世界遺産として観光客が訪れる地になっている。地殻変動や長い歴史の積み重ねが織り成す自然環境・人間環境のもつ本物の魅力が注目されることは、身近な日本、そして長崎に置き換えてみても同じことが言えよう。島原半島は、2008年に日本ジオパークの第1号に指定された。世界地質公園指定に向けた第一歩を踏み出したことを、地元をはじめわれわれ長崎県民で広く意識共有していく必要性を中国の旅を通して改めて実感した。

いまの環境問題をどのように評価し、私たちが活用や改善を図るべきなのか、本センターでも市民向け講座や共同研究の実施、学生への教育などを通して考えていきたい。

連載

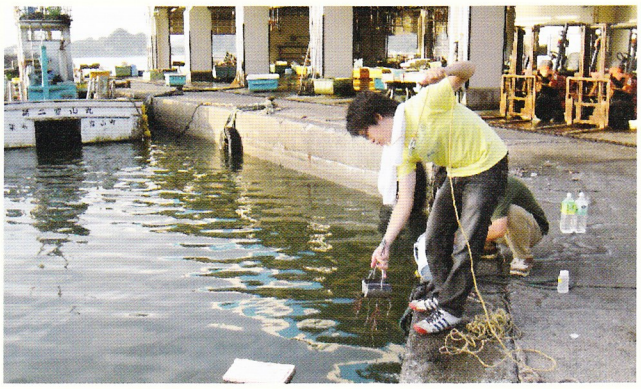
長崎まちエコ探検②　中島川の眼鏡橋

街なかを歩いていると、何気ない景観に意外な歴史や人びとの思いが詰まっているのを知ることがある。本コーナーでは、そのような長崎の隠れた自然・歴史・文化などのさまざまなスポットをご紹介する。

長崎市諏訪町と栄町を結ぶ歩行者専用橋。1634（寛永11）年に黙子禅師によって築造された、現存する日本最古の石造アーチ橋。黙子禅師は中国江西省の出身で、興福寺の2代目住職を務め、石橋の技術指導者でもあった。その後、1648（慶安元）年に平戸好夢により修復されているが、このことは、中国や朝鮮半島に近い九州が大陸の「石の文化」を受容し、在来技術や地元の石材を活用していった貴重な足跡の一つといえる。

長崎をはじめ、熊本の通潤橋や鹿児島の西田橋などとくに九州各県には石橋アーチ橋が多い。都市河川に架かっていたものの多くは、公園等へ移築されたりしているものの、中島川の眼鏡橋は1982年7月の長崎豪雨で損壊したものの現地に再建され、川面に昔日の姿を留めた点が特筆される。

—学生リレー企画—環境科学部ゼミめぐり②　<高尾ゼミ>



高尾研究室では、「世の中に役立つことを我々の出来る範囲で」をモットーに水質、底質（海底泥）、大気など幅広い環境分析をおこなっています。

水質分析では、河川水中の医薬品類、女性ホルモン類や下水由来の化学物質などの分析を行なっています。医薬品は極少量でも野生生物などに影響をあたえると考えられます。漁港の底質の分析では、高濃度汚染の現状をはじめて明らかにし、昨年全国の新聞で紹介されました。

最近では、長崎県民の森に大気観測所を設置し、中国大陸から飛来する化学物質を捕集し、その中に含まれる有害な化学物質の分析と生物影響評価に関する研究を進めています。その成果は、読売新聞（09.02.20）などで取り上げられました。

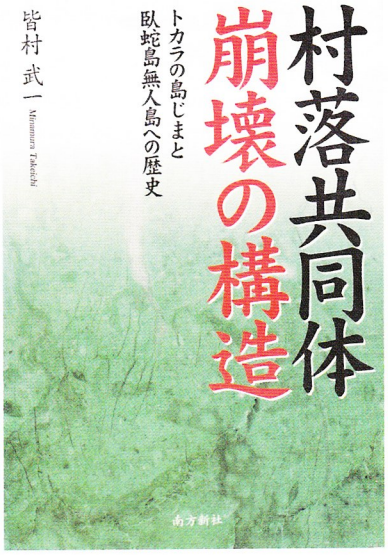
こんなお堅いことをやっていますが、高尾研また化学系の研究室はイベントも多く、楽しくアットホームな雰囲気で研究をしています。

（4年 荒木 清）

書　架

『村落共同体崩壊の構造 -トカラの島じまと臥蛇島無人島への歴史-』

（皆村武一著、南方新社刊、2006年、￥2,520）



今年7月22日、今世紀最長観測となる皆既日食が起きる。その絶好の観測地として、一躍「吐噶喇（トカラ）列島」の名は新聞紙上をにぎわすようになった。行政上は鹿児島郡十島村、南西諸島の屋久島と奄美大島の間に点在する島々から構成されている。

本書は、全島民移住計画により1970年に無人島となった臥蛇島の歩みを、近代以降の行政資料や元島民へのアンケート調査などをとおして社会経済論の立場から記されている。筆者は、鹿児島大学法文学部教授で、自身も沖永良部島の出身であり、島嶼社会に根づく共生・共助のあり方を自ら経験し、そして長年の研究を重ねている。「島の自然環境や社会環境を無視した開発は、島（「ムラ」）社会を崩壊に導く」危機は、高度経済成長期から現在にいたるまで未だに解決されていない。臥蛇島がたどった無人化という結果からわれわれは何を得ることができるのか、島に関心のある方にはぜひお薦めの一冊である。

事務局だより

◎進めてきました

〔主な受託事業〕

・国連持続可能な開発のための教育の10年促進事業（環境省）
・みんなで学び実践する「まちエコ講座」モデル事業（長崎県）

◎ニューズレターをお手軽に

定期購読しませんか？購読料無料、年間送料分の切手代（80円×4回）のみ負担。まずはセンターまで気軽にお問い合わせください。

本紙は季刊号として2,5,8,11月に発行していきます。学内配布のほか、長崎県・雲仙市の主要公共施設に設置。また、センターホームページからPDFファイルでダウンロードも可能です。

環境教育研究マネジメントセンター運営委員（2009年2月現在）

○早瀬　隆司 教授　（センター長、環境政策）
　馬越　孝道 准教授（副センター長、火山学・地震学）
◎深見　　聡 准教授（センター専任、観光学・環境地理学）
□高良　真也 教授　（副学部長、環境化学）
○中村　　修 准教授（環境経済）
　姫野　順一 教授　（経済学）
　福島　邦夫 教授　（民俗学）
　渡辺　貴史 准教授（地域計画学）
　西山　雅也 准教授（環境生物化学・土壌圏科学）
　陣野　勝久 環境科学部事務長

〔○…センター年報編集委員、□…センターニューズレター編集委員
◎…年報・ニューズレター編集委員長〕

◎『広報うんぜん』に、センター通信コーナーが誕生します

雲仙市が毎月発行している『広報うんぜん』に、環境教育研究マネジメントセンターの活動のようすや講座等の案内、随想・紀行文を「センター通信」（仮称）として連載させていただくことになりました。2009年3月号よりスタートします。雲仙市にお住まいの方をはじめ『広報うんぜん』を手にとる機会がありましたら、ぜひご覧ください。

□■編集後記■□

ようやく第2号が完成しました。今号からカラー版となり、さらに読みやすい紙面づくりに心がけていきますので、お気軽にご感想やご意見などお寄せください。／今年は、年度末に報告書（年報）の作成、年度明けから本格的にEキャンレッジ交流センターの整備、連続講座の具体化、その他の新企画の発表などを進めていきます。本紙でも随時ご紹介していく予定です。どうぞご期待ください。次号は5月20日付で発行予定です。（深見）

環境教育研究マネジメントセンター *News Letter*（第2号）
2009年2月25日発行
長崎大学環境科学部環境教育研究マネジメントセンター
〒852-8521 長崎市文教町1-14
URL http://www.env.nagasaki-u.ac.jp/
Tel&Fax 095-819-2720（深見聡研究室）
E-mail fukami@nagasaki-u.ac.jp
（編集長：深見 聡）
印刷：日本紙工印刷株式会社